

1 研究主題

地域の未来を見据え、探究的に学習する児童・生徒の育成
～経験単元の開発・実践と評価の工夫を通して～

2 主な研究教科および領域名

- 生活科及び総合的な学習

3 主題設定の理由

I 教育課題から

学習指導要領では、これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を生かし、子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力をより一層確実に育成することを目指すために、「社会に開かれた教育課程」や「カリキュラム・マネジメント」の推進が求められている。

これまで総合的な学習の時間は、学校が地域や児童生徒の実態等に応じて、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習とすることと同時に、探究的な学習や協働的な学習とすることが重要であるとされてきた。特に、探究的な学習を実現するため、「①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現」の探究のプロセスを明示し、学習活動を発展的に繰り返していくことを重視してきた。改訂された学習指導要領では、これまで以上に総合的な学習の時間と各教科等の相互の関わりを意識しながら、学校全体で育てたい資質・能力に対応したカリキュラム・マネジメントが行われるようにすることや探究のプロセスを通じた一人一人の資質・能力の向上をより一層意識することが求められている。

こうした状況を踏まえ、総合的な学習の時間においては、探究的な学習の過程を一層重視し、各教科等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活において活用できるものとするとともに、各教科等を越えた学習の基盤となる資質・能力を育成していかなければならない。そのためには総合的な学習の時間の目標を実現するにふさわしい探究課題を設定するとともに、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力を設定するよう改善していくことが重要である。

II 育成したい資質・能力と児童実態

資質・能力を設定するにあたり、甲山中学校区第3学年の児童生徒の実態及びつきたい力を推進委員会で協議し、協議内容を基に各校で検討した。その結果、主体性においては自ら課題を設定しその解決に向けて進捗管理する力、思考力・判断力・表現力においては、自分の思いを他者に伝えたり、他者の思いを押し量ったりする力に課題があることが明らかになった。そこで、甲山中学校区では、児童に身に付けさせたい資質・能力を次の2点に重点化させることとした。

- ①自発性（自ら課題を見つけチャレンジする力、自ら学習の進捗管理をする力）
- ②コミュニケーション能力（伝える力、受け取る力）

平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査と校内で実施した算数科における課題発見・解決学習に関わるアンケートにおいて、本事業と関連のある質問項目に対する児童生徒及び教職員の肯定的評価の割合として次のデータが得られた。肯定的評価の割合を表に示す。

令和3年度 全国学力・学習状況調査

本事業と関わりのある質問事項	肯定的評価の割合
総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいると思いますか。	95.0%
5年生までに受けた授業は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。	100%

校内で実施した算数における課題発見・解決学習に関わるアンケート

令和4年3月

本事業と関わりのある質問事項	肯定的評価の割合
自分の考えを説明することができます。	84.6%

総合的な学習の時間においては、これまでも課題発見・解決学習の充実に取り組んできたが、児童自ら課題を立てることについての肯定的評価は高いことが明らかになった。児童は新たな課題を解決しようと意欲的に取り組んでいる。しかし、児童の自己評価と教師の見取りには差があり、実際に課題を解決して学び続けようとする姿は十分ではない。また、昨年度までの算数科の研究においても考えを説明する設問で肯定的な評価が上がってきてはいるが、まだ十分でない。このことから、自ら課題を見出し、進捗管理する力や相手意識を持った表現をする必要性がある。

研究主題にかかわり、次のように言葉の解釈をした。

(1) 探究的に学習する児童とは

「29年解説」では、「児童は①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、自ら課題を見つけ、②そこにある具体的な問題について情報を収集し、③その情報を整理・分析したり知識や技能に結び付けたり、考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み、④明らかになった考えや意見などをまとめ・表現し、そこからまた新たな課題を見つけ、さらなる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返していく」と示されている。また、探究的な学習では、次のような児童の豊かな学習の姿が見られることが期待されると示されている。

- ・ 事象を捉える感性や問題意識が揺さぶられて、学習活動への取り組みが真剣になる。
- ・ 身に付けた知識及び技能を活用し、その有用性を実感する。
- ・ 見方が広まったことを喜び、更なる学習への意欲を高める。
- ・ 概念が具体性を増して理解が深まる。
- ・ 学んだことを自己と結び付けて、自分の成長を自覚したり自己の生き方を考えたりする。

(2) 「探究的な見方・考え方」とは

「29年解説」では、探究的な見方・考え方を「各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実生活・実社会の課題を探究し、自己の生き方を問い続けるという総合的な学習の時間の特質に応じた見方・考え方」と示されている。この力は、二つの要素が含まれる。一つは、各教科等における見方・考え方を総合的に働かせることである。総合的な学習の時

間における学習では、各教科等の特質に応じた見方・考え方を、探究的な学習の過程において適宜必要に応じて総合的に活用することである。二つは、総合的な学習の時間に固有な見方・考え方を働かせることである。これは、総合的な学習の時間に特有の物事をとらえる視点や考え方であり、特定の教科等の視点だけで捉えきれない広範な事象を、多様な角度から俯瞰して捉え、課題の探究を通して自己の生き方を問い続けることである。

(3) 経験単元の開発・実践とは

単元とは、児童の学習過程における学習活動の一連の「まとまり」という意味である。昭和26年の学習指導要領（試案）において、単元について「教材単元」と「経験単元」と分別された。「教材単元」とは、「系統的に配列された教材の一区分であって、例えば教科書の第一課、第二課といったまとまり」と説明されている。また、「経験単元」については、「児童の当面にしている問題を中心にして、その解決に必要な価値ある学習活動のまとまり」と説明されている。この経験単元は、J. デューイの「経験主義」から来ている考え方である。デューイは経験主義について「learning by Doing（為すことによって学ぶ）」と述べている。このことは、ただ体験することが重要であるということではなく、体験をし、その行為を振り返って反省的に思考することがあって初めて「学んでいる」という考えである。

これらのことから、経験単元の開発・実践とは、様々な経験をする中で問題解決を行うような場面を設定し、児童が自ら課題を見つけたり、解決するためにコミュニケーション能力を発揮する中で新たな課題を見つけながら学びを深めたりする単元の開発・実践と捉える。

これらのことを踏まえ、本年度も研究主題を「地域の未来を見据え、探究的に学習する児童・生徒の育成」とし、副題を「経験単元の開発・実践と評価の工夫を通して」と設定し、2年目の研究を行う。

4 研究仮説

生活科及び総合的な学習の時間において、様々な経験を通して問題解決を行うような単元開発を行い、ルーブリック評価をすることによって児童一人ひとりが育成したい資質・能力を明確にもって問題解決に取り組めば、自発性やコミュニケーション能力を育成することができるだろう。

5 研究内容

(1) PBL の視点を取り入れた単元の開発・実践

- ① 1つの解のない問いを扱う。
 - ・「世羅町をもっと元気にするためには？」という本質的な問いを扱う。
 - ・児童の思考のずれやギャップを生む場面の設定。
 - ・思考を可視化するためのICTの活用。
- ② 実生活・実社会の問いについて考える。
- ③ 社会に還元できる課題。

(2) ルーブリック評価を基にした振り返りの充実

- ① 1時間の学習を振り返らせて、児童が自己の成長を確認したり、目指す姿を児童と教師が共有したりできるようにする。
- ② 開発單元におけるルーブリックを設定する。
- ③ 振り返りの実態交流を行う。

6 検証の指標

	検証の視点	方法	検証時期	達成目標
①	目指す資質・能力を育成することができたか。	「資質・能力の育成に係るアンケート」(児童用)	4月 7月 12月 3月	肯定評価 80%以上
②	PBLの考え方を基に、探究の過程を意識した指導をしたか。	「探究的な学習の在り方に関するアンケート」(教職員用)	7月 12月 3月	肯定評価 80%以上
③	単元末のルーブリック評価において記述内容がB以上で、伸びが見られた児童の割合。	単元末のアンケート記述	7月 12月 3月	85%以上